

呼びかけ語の二人称対称人称詞：談話における特殊な機能を中心に

東出, 朋
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程大学院生

松村, 瑞子
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1784833>

出版情報：言語文化論究. 37, pp.37-50, 2016-10-14. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



呼びかけ語の二人称対称人称詞 ——談話における特殊な機能を中心に——

東出 朋¹・松村 瑞子

1. はじめに

日本語の二人称対称人称詞（あなた、お前、君等）は、自然談話では使用に強い制限がかかっていると言われている。小林（1997）は自然談話における対称詞の使用、特に対称人称詞の少なさ（全データの0.23%）を指摘している。田窪（1997）は、二人称の対称人称詞は使用に制限があり、基本的に同輩同士、あるいは、上位者から下位者にしか使えないと述べた。

しかし、自然談話を観察すると、二人称対称人称詞は興味深い振る舞いをしている。林・水口・小川（2005）は、自然談話における呼びかけ語「あんた」について、命題に関する強調（程度強調や驚きの文副詞的用法、モーダル性）と言表態度の強調を指摘した。東出（2016）は自然談話の呼びかけ語を対聞き手指向性という観点で観察し、二人称対称人称詞の興味深い用法を二点指摘した。一点目は対称詞＋対称人称詞の重ね用法（「お父さんあんた、ゴミ出してきてよ」における「あんた」）で、これは話し手の持つ何らかの前提を元に、感情を伴って発せられる。二点目は、聞き手への呼びかけとは言えない、調子整えや聞き手との一体感をもたらす「あんた」である。これは、林他（2005）の指摘する言表態度の強調と類似する。

ただ上述の二研究は自然談話の文字化テキスト及び映画のシナリオを対象としたものではあるが、この二つの用法で実際に用いられた二人称対称人称詞は少なかった。この用法を備えた二人称対称人称詞を含んだ発話が適切に聞き手に解釈される要因について、まだ説明が不足していると考えられる。

東出（2016）では、「お父さんあんた、ゴミ出してきてよ」は何等かの前提を要すると説明した。その一方、類似発話「お父さんあんた、今日の試合頑張ってるね」は途端に許容度が変わる。発話場面を想像しにくいとも言える。本稿では、落語や講演会等、自然談話の種類を広げて用例観察を行い、二人称対称人称詞の自然談話特有の用法の二種類を分析し、その要因を考察する。そして、二人称対称人称詞は自然談話では用いられにくいという定説に対して、状況さえ許せばむしろ積極的に用いられることを示す。

2. 呼びかけ語の定義

日本語の談話における呼びかけ語を定義するのは非常に困難である。東出（2016）では、対称詞及び呼びかけ語という語の定義について、先行研究を踏まえた上でその定義付けを試みた。

まず、鈴木（1973）の呼称の三分類（自称詞：話し手が自分を表す言葉、対称詞：話し手が相手を表す言葉（呼格的用法、代名詞的用法）、他称詞：対話の中に登場する第三者を指す言葉）に従い、さらに「対称詞」の呼格的用法のうち、助詞の伴わない語を対象とすることにした。しかし、

それらは当該発話における統語的、意味的結びつきに程度差が見られるため、便宜的に三種類に分類した。まず、統語的、意味的に呼びかけ語であると確実に判断できるものをⅠ類、ハヤガの省略と混同する恐れが低い文として、①命令・依頼～て（ください）、②勧誘の形～しよう、③禁止の形～するな、等をⅡ類とした。①～③の文型では、もし発話者がハヤガで表現されるようなニュアンスを出したい場合、助詞を省略せずに言うはずであろうからである。命令や禁止に比べると助詞の付加の必然性が異なり、呼びかけ語認定が揺れるものをⅢ類とした。

尚、本稿では主に発話冒頭及び冒頭付近、発話の途中に出現する呼びかけ語を扱う。ただし、適宜発話末に現れる呼びかけ語も扱う。

3. データ

主たる会話データは、日本人母語話者の自然談話を録音、文字化した資料である。自然談話における呼びかけ語は、自然談話で多数観察されるフィラーやあいづちとはその出現頻度という点で大きく異なる。したがって、談話参加者の属性、談話の場、話題などを統一・制限すると呼びかけ語が一切観察されないこともある。このような理由から、日本人母語話者同士（二人以上、電話も含む）の自然談話を文字化した既存の資料を活用することにした。また、自然談話として採集が困難な「非難」「叱責」「喧嘩」「愛情表白」などの場面を参考とするために、映画及びラジオドラマのシナリオ、また日本語書き言葉コーパスもデータとすることにした。なお、適宜作例も用いる。データ²は表1の通りである（添付資料参照）。

4. 考 察

本節では、「お父さんあんた、ゴミ出してきてよ」（以後、重ね用法と呼ぶ）の用例を実際のデータから観察し、その条件について考察する。

4.1 重ね用法の条件

重ね用法を観察すると、次の条件が抽出できる。なお、【条件0】は重ね用法の大前提である。

【条件0】二人称対称人称詞（あなた、あんた、おまえ、おめえ、てめえ、きみの類、以下省略）を用いることができる関係、または場でなければならない。また、そのような関係、場でない場合、そのような関係、場を話し手が設定している。

例えば、友人同士、上から下（上司から部下、教師から学生、親から子など）の関係において、また雑談やけんかの場面で用いることができる。

【条件1】二番目の対称詞は一番目と別のものを用いる。同じ発話で、同じ対称詞を用いることを避ける。以下の(1)(2)(2')参照。

(1)

09B それで、その人を介抱じゃないですけど、「大丈夫ですか」言って部屋まで送ってあげて、帰ったら兄さんらに「大輔おまえ何しててん遅いやんけ」って言われて、「いや僕実はいま、エレベーターでなんかこうこうこうでね」言って (7:107)(Ⅲ類)³

(2) 大竹看護婦：まあシゲちゃん、どうしたのあんた！(18)(Ⅲ類)

(2') ??まあシゲちゃん、どうしたのしげちゃん！

【条件2】二番目の対称詞が二人称対称人称詞になる。

(2'') ??まああんた、どうしたのシゲちゃん！

(2'')の「あんた」と「シゲちゃん」は通常、同一人物として解釈するのは難しい。

また、完全なⅠ類、つまり文から完全に独立している呼びかけ語はないため、次の条件も導くことができる。

【条件3】一番目の対称詞が呼びかけ語として解釈され、二番目の対称詞は（純粋な）呼びかけ語として解釈されない。文の項として、後続する述部により強く関係づけられる。

呼びかけ語に限らず、文内に組み込まれても、繰り返しを避ける傾向がある(3)(4)。(3')及び(4')のような例は少ない。

(3)

宏治 京子、オレにはお前だけやねん、お願いや…
京子 ほんなら、さようなら(12)(Ⅰ類)

(3') 京子、オレには京子だけやねん

(4) 9555 あっ、[名字の一部] ちゃん、あなたはすごい、あたしは尊敬しちゃう。(8-1)(Ⅲ類)

(4') 〇〇ちゃん、〇〇ちゃんはすごい、あたしは尊敬しちゃう。

条件1及び2から必然的に導かれる事実として、先に対称人称詞を用いてしまった場合、二番目に来る語は再帰代名詞の「自分」を用いるしかない(5)(6)。

(5) 唐木：お前自分がうまくいってねえからって岡村ちゃんの悪口言うなよっ(21)(Ⅲ類)

(6)

剛 …俺は、オッサンみたいにならなかつただけだよ
竜司 おまえ、自分だけよけりゃいいのかよ。自分だけ貧困から抜け出せりゃいいのかよ(19)(Ⅲ類)

(3')(4')が示すように、同じ対称詞が繰り返されることもあるが、日常会話では繰り返し、言い淀み、言い直し等は頻繁に起こり得るし、呼びかけ語自体が日本語において必須の文法要素ではないため、繰り返しても非文にはならない。また以下の(7)(8)は、二人称対称人称詞を基本的に用いることができない関係（息子と父、息子と母）、つまり条件0にそもそも違反しているため、繰り返

さざるを得ない。

(7)

伊野 お父さん、お父さんのペンライト、あれ、失くしてしまった
父の声 あー。そうですか。(18)(I類)

(8) 洋二朗：母ちゃん…なにしてんだ母ちゃん (13)(III類)

本節では、重ね用法の条件を列挙し、実例で確認した。ある特定の条件の下では、二人称対称人称詞の使用がなんら違和感のない発話であることが分かる。

4.2 項としての解釈のされ方

本節では、前節の条件3について詳細に検討する。対称詞が二つあり、同じ対象を異なる形式で示しているという現実がある以上、その二つは何らかの意味的または機能的な差異を備えていると考えられる。ここでは、当該発話の文における項としての要素の違いを、具体例を通じて観察する⁴。

まず二人称対称人称詞を用いることができる関係(A)の場合、一番目が呼びかけ語、二番目が述部に関係する項として解釈される。(9)は当該対称人称詞が述語の主語として働いている例である。(9a)はもっとも自然な発話である。対称詞が一つであり、それが呼びかけ語か述語の主語か判断できない(9b)及び(9c)は、どちらも意味的、統語的に違いがないという点で、類似した文である。(9d)及び(9e)は、非文ではないが通常は言わない。(9f)は、条件1及び2に違反しており、非文である⁵。

(9)

- | | | | |
|----|---------------|---------|------------|
| a. | のおちゃん、あんた | 食べるでしょ？ | (16)(III類) |
| b. | のおちゃん、Ø | 食べるでしょ？ | |
| c. | あんた、Ø | 食べるでしょ？ | |
| d. | ??のおちゃん、のおちゃん | 食べるでしょ？ | |
| e. | ??あんた、あんた | 食べるでしょ？ | |
| f. | *あんた、のおちゃん | 食べるでしょ？ | |

(10)は、二番目の対称人称詞が後続文の主語の一部として働いている文である。(10a)はもっとも自然な発話であろう。(10b)は非文ではないものの、実際の発話を想定した場合、冗長さや不自然さを伴うことを否めない。(10c)及び(10d)は、同様に、類似した文である。場面や文脈(9b)及び(9c)に依存して「誰の部屋」について尋ねているか明白な場合は自然な発話であるが、文脈無しでは「誰の部屋」に関する質問なのか情報が不足している。(10e)は不自然である。(10f)は、「おまえ」と太郎が別人なら自然な文だろうが、そうでない場合は非文である。

(10)

(全て作例)

- | | | |
|----|-----------|---------|
| a. | たろう、おまえの | 部屋はどこだ？ |
| b. | ?たろう、たろうの | 部屋はどこだ？ |
| c. | ?たろう、Ø | 部屋はどこだ？ |

- d. ?おまえ、Ø 部屋はどこだ？
 e. ??おまえ、おまえの 部屋はどこだ？
 f. *おまえ、太郎の 部屋はどこだ？

次に、二人称対称人称詞を用いることができない関係(B)の場合を検討する。まずこの関係はすでに条件0に違反しているため、(11d~f)は発話できない。(11a)は、多少の冗長さはあるものの発話可能である。またこの場合、二番目の「山田先生」が「先生」になる可能性が高く、その際の二番目の人称詞は一番目と同じ人物を指していると解釈される。(11b)も自然に発話できる。(11c)は、日本語のわきまえ⁶に違反しているため、通常は発話されない。

(11) (全て作例)

- a. 山田先生、山田先生の 部屋はどこですか？
 b. 山田先生、Ø 部屋はどこですか？
 c. ??山田先生、あなたの 部屋はどこですか？
 d. *あなた、あなたの 部屋はどこですか？
 e. *あなた、Ø 部屋はどこですか？
 f. *あなた、山田先生の 部屋はどこですか？

以上の観察から条件3が確認された。(9b、c)、(10c、d)及び(11b)は対称詞一つのため、呼びかけ語とも述部に関連する項とも判断しがたく、あいまいな解釈しかできない。別の言い方をすると、判断の不可能性は、そのどちらとも取れるように判断を保留にできる可能性も意味する。

林他(2005)は、「文」と「発話」において項の解釈が異なることを示した上で、「あんた」という語は、命題との関係(「文」における項性)に強弱があり、文的なものから発話的なものまで連続体をなしていることを主張した。林他(2005)は「あんた」について考察を行ったが、同様のことは本稿の呼びかけ語にも当てはまる。呼びかけ語も、命題との関係によって項の解釈が定まらず、その連続体の上にあると考える。

4.3 想定とのずれ

本節では、重ね用法について具体例を示しながら考察する。その過程で「想定」という切り口を用いる。会話は常に現場に依存して、様々な背景知識を共有した会話参与者によって成り立つ。そして私たちは、過去や現在に関する知識や情報をもとに、先を予想したり、こうであるだろうと想像しながら話している。このような、話し手が持つ予想、本来そうであるべきだという想像をここでは「想定」と呼ぶ。(12)~(14)は、そのような話し手の持つ「想定」が容易に分かる例である。

- (12) A: ピエロですって。沙織さん、あなた、これなあに？こんなもん持ってきていいの⁷？
 B: なによ…(22)(Ⅲ類)

(13)

- 組合長 千代さん！
 組合幹部1 あんた、今更ハワイに寝返る気か？
 組合幹部2 婦人会の会長だっぺよ！

組合長 千代さんあんた、気いふれたのか? (13)(III類)

(14)

4367 で一、[名字]、じゃ、おまえ 2年んとき、なにやってたのよ。

4368 ん一、###。

4369 @★<笑い>

4370 →なんにも←やってなかったの。

4371 なんにもやってなくて、ただ委員会は一やった。<言いさし>

4372 委員会だけね。

4373 うん。

4374 部活は入ってなかったの。

4375 部活はやってません。(8-1)(III類)

(12)～(14)の全ての文脈において、話し手にとっての想定が明確であると同時に、現実にはその想定とずれがあることが見てとれる。持ってきてはいけない(想定)のに持ってきている(現実)(12)、こちらの味方のはず(想定)なのに裏切ろうとしている(現実)(13)、普通二年生なら何かやっているはず(想定)なのに何もやってない(現実)(14)という、想定と現実のずれである。これらの発話は、どのようなイントネーションで発話したとしても話し手の驚きや非難、不審など、マイナスの感情を伝達する。そして、この話し手が持つ想定と現実の間に見る「ずれ」は、重ね用法という形式によって言語化され、聞き手に対する非難や怒り、不審等の感情を(少なからず)抱えていることが伝達されることになる。つまり、呼びかけ語を二つ重ねるというその有標性が、話し手にとっての想定と現実のずれを表現し、結果として聞き手に有標な解釈を要請しているのである。

以上の観察から、重ね用法は次のようにまとめられる。

①呼びかけ語を繰り返すことで、なんらかの有標の感情を伝達する。

②この有標の感情は、話し手の持つ想定と現実のずれから生じる。そのずれは非難、怒り、不審等のマイナスの感情を伴う場合が多い。

想定と現実のずれが、多くの場合話し手にとってネガティブな事態であり、マイナスの感情を伝達するということを以下で検討する。次の例を見られたい。

(15) お父さん、 (a. 塩取って / b. コンビニでタバコ買ってきて / c. 洗車行ってきた) よ。

(16) あんた、 (a. 塩取って / b. コンビニでタバコ買ってきて / c. 洗車行ってきた) よ。

(17) お父さんあんた、(a. 塩取って / b. コンビニでタバコ買ってきて / c. 洗車行ってきた) よ。

(いずれも作例)

(15a～c)の「お父さん」は、呼びかけ語として後続する命令文の発話に中立的な感情で結びつく。(16a～c)は、(15)に比べて話し手の聞き手に対するマイナスの感情が感じられるが、それは「あんた」という語そのものの使用制約から導かれると考えられる。(15a～c)及び(16a～c)においては、話し手が抱えるずれは存在しない。もしマイナスの感情が伝達される場合、それはパラ言語的影響によるものだろう。

それに対し(17a~c)は、重ね用法という明示的手段によって、特徴的な音調を伴わずとも話し手の何らかの感情が表出される。というのも、(17a~c)が発話されうるのは、次に示すような非常に制約された具体的な状況となるからである。(17a)において、単に「塩を取る」という簡単な行為を相手に要求するために「お父さんあんた」といった表現を用いるのは非常に不自然に（もしくはきつく）聞こえるだろう。しかしたとえば、お父さんは塩をいつも独り占めしている、何度言っても取ってくれない、話し手が非常にいらだっている等の状況があれば自然な表現となり、むしろ積極的に使用されることになろう。同様のことは(17b)及び(17c)についても起こる。「コンビニまで出かける」「車を洗車する」という行為は相手にとって負担になるものであるため、丁寧な表現を用いるのが通常であろう。しかしながら、今朝開けたばかりの私（妻）のタバコを夫が全部吸ってしまった状況で、妻にとって本来タバコはまだある（想定）はずなのにもう空である（現実）という場面、また一昨日自分（妻）が洗車したばかりの車を昨日夫が汚しそれに夫は気づいていない、言い換えると、妻にとって本来車は今日もきれいなはず（想定）なのに汚れている（現実）という場面であれば、「お父さんあんた」という表現の使用が可能になるだろう。(17a~c)から分かるのは、具体的な状況において、想定と現実がずれていれば、当該発話が自然なものになるということである。そしてこれらは全て、話し手にとっての現実がネガティブな事態であり、その評価としてマイナスの感情が表出されている。

では、プラスの感情が伴うような状況で重ね用法は発話可能なのだろうか。

(18) (a. お父さん / b. あんた / c. お父さんあんた)、今日の試合頑張ってね。 (作例)

(18a, b)は、(15)(16)と同様に自然に発話できるのに対し、(18c)は一見、母語話者としていささか不自然さを感じるかもしれない。しかしこの発話が自然になる状況もある。例えば、草野球リーグ戦で4戦連続惜敗を喫しており、今日こそ、最低でも一つは勝たねばならないという状況である。話し手にとって、本来一つくらい勝たねばならないという想定があり、これと現実がずれているので発話可能となる。ただし、きっと詰問調になることだろう。なぜなら「想定と現実のずれ」という事実自体が話し手にとってネガティブな事態であるからだ。もしそのような状況が無ければ、発話は不可能である。したがって、次の点を付加することができる。

③有標の感情は必ずしもマイナスばかりではなく、数は少ないが、プラスの感情が伝達される場合もある。

とはいえ、現実の事態が必ずしもネガティブとは限らないことを次の例で確認できる。

(19) (いつも優しいけれど) 太郎さんあなた、本当に優しいのね。 (作例)

(19)の場合、話し手にとっての想定は「いつも優しい」という過去から続く事実であり、ここでは「今日も優しい」という現実を再確認している。この「本当に優しい」ということは、話し手にとってポジティブな事態であり、一見これまで見てきた重ね用法とは異なっているように見えるが、それらはいずれも話し手が自身の想定と現実とを比較しているという点において共通している。だからこそ、少しでも音調を間違えば皮肉と解釈されてしまう可能性が常に残されている。

以上の観察は、次のようにまとめることができる。話し手は、目の前の現実の事態を踏まえ、想

定と現実とずれがあることを重ね用法という手段で言語化する。現実の事態は、話し手にとってネガティブ(17)でもポジティブ(19)でもありうる。現実の事態と想定とずれを話し手がいかに評価するか、という話し手の感情については、主にマイナスの感情が表出される場合が多い((12)~(14)及び(17))が、まれにプラスの感情が表出される((18)(19))こともある。

(15)~(19)から、重ね用法は、話し手が独断的に何らかの想定とそこからのずれを設定できれば発話可能であることが分かった。尚、短文における不自然さは、状況を想像する難易度の違いにすぎないといえる。

次に、二人称対称詞が単独で用いられる場合の感情表出を検討してみたい。

(20)

B4b やっぱ暗いと集中するからじゃないですか。

B4b 近くからのその、情報が。

M2 へえ、そうなんだ。

M2 「B4b 姓」自信あるじゃん。

B4b はい、でればいいなあという感じです。(1;146)(Ⅲ類)

(21)

2843 おまえ、それいいなー<笑い>。

2844 タン塩。(8;2)(Ⅲ類)

(20)(21)の例は、いずれも二人称対称詞が一つである。(20)に「おまえ」が追加され「B4姓お前自信あるな」であれば、以前は自信がなかったという想定が、同様に(21)に対称詞「田中」が追加され「田中お前、それいいなー」であれば、話し手もタン塩が欲しいといった想定を想像でき、想定と現実のずれが伝達されるだろう。しかし実際は、そのような想定は発話の瞬間話し手にとって重要ではない、もしくはそもそも想定がないので、重ね用法で発話されていない。どのような呼びかけ語でも、一つであれば想定と現実のずれは伝わらない。そもそも想定とのずれが表現されていないために、マイナスの感情は伝達されにくい。呼びかけ語が一つの場合、マイナスの感情はパラ言語的手段によってのみ表現可能である。

重ね用法「お父さんあんた」と、それに対応する二人称対称人称詞一つの用法「あんた」の違いに関する上述の議論は、以下のようにまとめることができる。

A. 「あんた」独自用法 (16)

後続する事態に対するマイナス／プラスの感情を表出するものの、マイナス／プラスの感情はパラ言語的要素によってマークされる。後続する事態に対する「想定」はない。したがって評価は話し手のその場における判断といえる。

B. 「お父さんあんた」用法 (重ね用法、(17))

後続する事態に対する話し手の「想定と現実のずれ」から生じる評価を表出する。「ずれ」自体が否定的評価を示すことが多いことから、重ね用法もマイナスの感情表出になることが多いが、プラスの感情表出を排除するものではない。マイナス／プラスの感情の違いは文脈とパラ言語的要素によってマークされる。

「あんた」独自用法とは異なり、重ね用法には予め話し手の「想定」があり、話し手はその「想定」をもとに後続する事態に対する評価を行う。この「想定」の有無が「あんた」と「お父さんあんた」を区別するものである。

以上の考察から、重ね用法は、ある状況における話し手の想定と現実のずれを前提としており、有標の感情表出（大抵はマイナスの感情）を示す、とまとめられる。

4.4 単独で用いられる特殊用法

本節では、重ね用法に続いて、自然談話で見られる興味深い二人称対称人称詞の二つ目の用法を観察する。以下の例を見られたい。

(22)

- 16 抱え上げたりコお風呂入れるときにはエおあんたおまえは休んどけやーちゅうてきのうも行ったきのうおとついでですけどね行っただよお風呂夜ね (10;8)(I類)

(23)

- 244 お姉さんまた帰ってきたよ一言うて帰ってくる本人はうれしいけど来られる方はあんた夜も寝不足で料理作ったりいろいろせにゃいかん (10;8)(I類)

(24)

- 712 ほいで失語症右の手足がマヒ来たということはアノよっぽどの覚悟をしてもらわないかんのん特に動かないようなマヒんなったら
713 これあんた奥さん女の人はねつらいよ (10;8)(I類)

(25)

- W050 逢隈はあんた8月2日に何じゃが防衛庁長官がアノ視察に来るんじゃ
V056 えーたどこに来る多摩 (10;29)(I類)

- (26) 男はむりに女を誘う、女はいやといいながら、その実よろこんで誘われる。それがあんた人情の機微てえもんでしょうが。なのに近ごろの若え奴らときた日にゃ、女が先に立つ (23)(I類)

<落語>

- (27) ぽつツと出てきた、雲。『あえれえ雲が来たような』、みるみるうちに真ッ黒。墨を流したよう……そのうちに風が変るてえと疾風^{はやて}てえやつだア、ぽつりツと降ってきた雨はまるで細引^{ひき}だア。こいつがおめえ盆をひつくる返^{かえ}したよう、ざあーってえとおめえ一寸先ア闇だア。一生懸命^{いっしょうけんめい}なって舟を操つてみたが、いくら腕が達者でもよ、乗ってる奴が大勢で舟が小せえときてるんだ、操りきれぬわけのものじゃアねえ。横波^{よこなみ}をひとつ喰^くうてえと（ぼんと手を打って転覆する仕草）舟^{ふね}がぱりと……ええ、ひつくる返^{かえ}った……（声をひそめ）ひつくる返^{かえ}っちゃッ……あっしゃ夢中^{めいちゆう}なって板子一枚抱^{いだ}いて、飛込^{とこ}んだまでは知ってるんだがあと夢中。我に帰^{かえ}ってみると知らねえ顔^{つら}ぱっかり並^{なら}んでるんだ。⁸

(22)～(27)の例はいずれも【条件0】に関連して、二人称対称人称詞が使える「発話場」を設定

したものとする。話し手が勝手にそのような「場」を設定することは聞き手を無視した話し手本位の行為と言えるが、しかし一方では、話し手の聞き手に対する強い接近感、つまり、聞き手と「発話場」を共有したいという話し手の強い気持ちを示すものとも言える。どのような語であれ、相手と呼ぶという行為は、呼ばないという行為に比べ、話し手の相手に対する強い接近感を言語的に表示したものだからである。ただしこの用法の二人称対称人称詞は、現在目の前にいる固有名詞を持った具体的な対象を指しているのではない。東出（2016）では、この用法は二人称対称人称詞の外延的意味（denotative meaning）が薄れ、聞き手との一体感を目指していると考えた。話し手は場を強制的に設定し、聞き手をその場に巻き込もうとしている。このような効果は落語の（27）に顕著である。

重ね用法においては、話し手の発話現場に即した具体的な想定が存在した。それに対してこの用法は、具体的な発話現場に関与する事態に注目するのではなく、発話の「場」全体に聞き手を引き付ける。そしてこのような発話は、話し手の聞き手に対するポジティブな態度をもとに成り立っている。ポジティブな態度とは、喜怒哀楽の具体的な感情ではなく、この話をあなたとしたいと強く望む、という聞き手に対する話し手の態度である。ポジティブな態度でネガティブな内容、たとえば罵倒や非難、叱責を述べることは理論的には可能かもしれないが、実例は見当たらない。（22）～（27）の発話内容はいずれも、特にネガティブな内容とは言えない。内容より発話の場全体が重要だと考える。つまりこの用法では、個人としての具体的な聞き手ではなく漠然とした聞き手を、具体的な事態・内容ではなく発話の「場」全体に巻き込んでいるのである。

以上の考察をまとめると、この単独特殊用法は、当該のインタラクションに聞き手を強く巻き込み、聞き手へのポジティブな発話態度を示すことを目指していると考えられる。したがって、単独特殊用法は次のようにまとめることができる。

①発話の場全体に聞き手を強く巻き込む。

②聞き手との一体感を得るという、聞き手に対する話し手のポジティブな態度を表出する。

4.5 二つの用法の背景

前節までで、二種類の呼びかけ語の用法を観察した。まず重ね用法は、話し手の持つ想定と現実のずれのもと発話される。そして、この有標な呼びかけ語の使用は有標の感情、大抵はマイナスの感情を表出する。次に単独特殊用法は、聞き手を発話の場に強く巻き込み、それは聞き手に対するポジティブな発話の姿勢を示す。つまり、「おまえ」「あんた」「あなた」等の語が、ある場面ではマイナスの感情を伝達し、別の場面ではポジティブな発話姿勢を表出する。

「あんた」「おまえ」等の二人称対称詞については、社会言語学的観点から、それらが持つ使用制限について様々に検討されてきた。例えば大高（1999）は、「あなた」は私的・公的な関係ともに話し手と聞き手が互いに友好関係にあり親愛表現としてのみ使われるが、互いが敵対関係にある場合は他の人称代名詞（「きさま」「てめえ」「あんた」等）が選択されると述べた。また、これらの語は社会的な下位者から上位者に対しては使用が望ましくない、という母語話者に共通する規範的意識も存在する。つまり、「あんた」「おまえ」等の語はそれぞれが何らかのコンテキストを持っており、それは実際の使用に反映されている。

しかし、同じ形式が二つの異なる用法を持つ要因は、「あんた」「おまえ」等の語の持つコンテキストが実は動的であることと関係していると考えられる。横谷・長谷川（2010）は家族内呼称の選択が家族関係を表していることを量的調査によって明らかにしている。その過程で、強調されていないものの非常に興味深い指摘がある。

談話モダリティを人称代名詞は欠いているため、人称代名詞はそれが使用される文脈に応じてその意味が変わってしまう（中略）。例えば、「あなたは私をいらさらさせる」と「あなたは私を安心させてくれる」の場合、前者のあなたが否定的な意味を示すのに対し、後者のそれは肯定的な意味を示す。言い換えれば、人称代名詞の聞き手への意味はそれが使用される文脈によって変化している。

（横谷・長谷川2010：2）

要するに、「あなた」という語は、用いられる文脈に応じてニュアンスが変化するというのである。他方「お父さん」「パパ」「おやじ」「おとつあん」は、確かにそれぞれ語特有の固定したニュアンスを持つ。

「あなた」のニュアンスが文脈に応じて変化するという指摘は、その他の二人称対称人称詞にもある程度当てはまる。以下の作例（28）においては、a（とc）は男の友人同士、bは母が息子に言う場合等を想定できるが、dとeの発話が可能な状況を想定することは困難であろう。

- (28) (a. おまえ / b. あんた / c. [?]おめえ / d. ^{??}きさま / e. ^{??}てめえ) の部屋、(y. おしやれだね / z. きたくないよ)。
（作例）

(28ay) 及び (28by) においては「おまえ」「あんた」が発話者の好意的な感情のニュアンスを持ちうるのに対し、(28az) 及び (28bz) においては当該の語自体に否定的なニュアンスが加わる。また、そもそも「きさま」「てめえ」は現代日本語においてネガティブなコノテーションしか持っていないため、動的なニュアンス変化はあり得ず、(28d) (28e) は発話が困難である。

自然談話において代名詞用法として比較的頻繁に用いられうる二人称対称人称詞は「あなた」「あんた」「おまえ」の三語である。これらは、横谷・長谷川（2010）の言うように、発話の文脈に応じて語のニュアンスが柔軟に変化する語である。そしてこの三語は、重ね用法及び単独特殊用法において観察された語と共通している。この事実、文脈に応じて変化する「おまえ」「あんた」「あなた」の語が、重ね用法としてはマイナスの感情伝達を可能にし、また単独特殊用法としては話し手のポジティブな発話姿勢を表示するという二つの用法を説明しているのではないだろうか。重ね用法の場合は、そもそも話し手の内面にある潜在的な想定とのずれがあるためネガティブな発話になりやすい。二人称対称人称詞はその結果として明示されるが、その文脈でそれらはネガティブなニュアンスを持っている。一方、単独特殊用法においては、話し手はそもそも発話の場全体において聞き手（及びその発話現場）に対してポジティブな発話姿勢を抱き、二人称対称人称詞はその文脈において用いられるからこそ、ポジティブなコノテーションを持つことができるのである。

5. まとめ

本稿では、日本語自然談話における興味深い二種類の呼びかけ語の用法を観察した。まず重ね用法は、話し手の持つ想定と現実のずれのもと発話され、この有標な呼びかけ語の使用は有標の感情、大抵はマイナスの感情を表出する。次に単独特殊用法は、聞き手を発話の場に強く巻き込み、それは聞き手に対するポジティブな発話の姿勢表明となる。「おまえ」「あんた」「あなた」等の語が、ある場面ではマイナスの感情を伝達し、別の場面ではポジティブな発話姿勢を表出するという言語使用は、その背景に、それらの語が実際の使用において動的にコノテーションを変化させるという文

脈依存的な語であることが影響していると言えるであろう。

今後は、重ね用法と接点を持つと考えられる卑語や愛称語等 epithet との関連、また単独特殊用法と接点がある you know のような聞き手を発話に巻き込むその他の語との関連も検討する必要があるだろう。

注

- 1 九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程大学院生
- 2 各データ制作者はそれぞれの文字化ルールに従っているため、本稿で扱う全てのデータに共通した文字化ルールはない。句読点の打ち方、発話割り込み、あいづち、笑い、ポーズ、イントネーションの記述方法とその正確性など、様々な点で統一されていない。また、元データ（音声や映像）には必ずしもアクセスできない。分析の際にはこの点も鑑みなくてはならない。
- 3 (7; 107) は、添付資料 7 番の 107 ページを指す。(III 類) は、前述した呼びかけ語の認定度を表す。また、引用した例文の冒頭の番号や名前は、元資料に記載されているママである。
- 4 当該の「あんた」のほとんどは、後続する文の主体として機能していることが多い。
- 5 二人称対称人称詞の後に二人称対称詞が続く語順（「あんたのぶちゃん」の語順）が非文となる原因は、東出（2016）を参照されたい。
- 6 「わきまえ」という用語については、井出（2006）等を参照されたい。
- 7 網掛けは、話し手の想定を導く部分を表す。
- 8 『八代目春風亭柳枝全集』（1977）弘文出版、八代目春風亭柳枝による「大山詣り」速記録からの引用。<http://www.asahi-net.or.jp/~ee4y-nsn/rakugo/HRS0104.htm> [2016年 3 月 10 日確認]

参 考 文 献

- 井出祥子（2006）『わきまへの語用論』大修館
- 大高博美（1999）「日本語における対称指示語彙選択のストラテジー」関西学院大学言語教育センター紀要委員会（編）『言語と文化』2, 29-41.
- 小林美恵子（1997）「自称・対称詞は中性化するか」現代日本語研究会（編）『女性のことば・職場編』113-137.
- 鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書
- 田窪行則（1997）「日本語の人称表現」田窪行則（編）『視点と言語行動』13-44, くろしお出版
- 林博司・水口志乃扶・小川暁夫（2005）「項の「文的」解釈と「発話的」解釈——呼びかけ詞の対称言語学的考察」串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『活動としての文と発話』253-288, ひつじ書房
- 東出朋（2016）「呼びかけ語の焦点化——対聞き手指向性の観点から——」（投稿中）
- 横谷謙次・長谷川啓三（2010）「呼称が示す談話モダリティ——無規定な呼称とそれ以外の呼称との比較——」東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第59集, 第1号, 275-292.
- 「大山詣り速記」<http://www.asahi-net.or.jp/~ee4y-nsn/rakugo/HRS0104.htm> [2016年 3 月 10 日確認]

添 付 資 料

表 1. データ一覧

資料番号	資料名
1	因京子・松村瑞子（編）(2007)『平成十九年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
2	松村瑞子・趙海城（編）(2008)『平成二十年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
3	松村瑞子・王萌（編）(2009)『平成二十一年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
4	松村瑞子・李曦曦（編）(2010)『平成二十二年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
5	松村瑞子・李曦曦（編）(2011)『平成二十三年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
6	松村瑞子・李曦曦（編）(2012)『平成二十四年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
7	松村瑞子・王丹丹（編）(2013)『平成二十五年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
8-1	現代日本語研究会（編）(2004)『男性のことば・職場編』ひつじ書房『女性のことば・職場編』
8-2	現代日本語研究会（編）(2004)『男性のことば・職場編』ひつじ書房『女性のことば・職場編』
9	李麗燕(2000)『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究』くろしお出版
10	山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
11	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』奥寺佐渡子(2006)「時をかける少女」
12	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』小林聖太郎・吉川菜美(2006)「かぞくのひけつ」
13	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』李相日・羽原大介(2006)「フラガール」
14	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』森義隆(2008)「ひゃくはち」
15	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』向井康介(2008)「俺たちに明日はないッス」
16	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』宇治田隆史(2008)「ノン子36歳（家事手伝い）」
17	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』斎藤ひろし(2009)「余命1ヶ月の花嫁」
18	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』西川美和(2009)「ディア・ドクター」
19	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』荒井晴彦・井上淳一(2010)「パートナーズ」
20	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』真辺克彦(2011)「毎日かあさん」
21	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』大根仁(2011)「モテキ」
22	社団法人日本放送作家協会編(1989)『現代日本ラジオドラマ集成』
23	日本語書き言葉コーパス

The Special Usages of Japanese Second Person Pronouns in Conversation

Tomo HIGASHIDE and Yoshiko MATSUMURA

This paper focuses on the two usages of Japanese second person pronouns, for example “anta”, “omae”, “kimi”, that occur in natural conversation. Firstly, the usage where a second person pronoun follows an address term occurs when there are some differences between reality and the presumption that the speaker has, and when the speaker experiences mostly negative emotions. Secondly, a single second person pronoun used as an isolated unit does not directly point to the real hearer in conversation, but instead sets the situation for use of that pronoun, shows positive attitude toward the hearer and makes him involved in the situation. These pronouns create negative and positive effects in conversation, because they dynamically change their connotation depending on the context.